

性たちも、その代表的イベント「すぴこん」で見られるように、宗教色の強いセッションを購入することで、新しい「私」が創出されるのを期待しつつ、新しい「世界」の創出への関心は持っていない。だが、彼女たちはさらに、オウム真理教の女性たちとも異なり、他の商品と比較する「品定め」や、「スピリチュアル」に関心をもつ人びとと交流する「社交」を楽しむことに魅力を見出していることが、彼女たちへのインタビューから伺われる。「スピリチュアル・ブーム」もオウム真理教と同様に、暴力を胚胎しながら、オウム真理教とは異なって、それが常に昇華されるのは、「品定め」と「社交」という彼女たちにとっての魅力が、安全装置として機能しているからなのである。

以上、オウム真理教と「スピリチュアル・ブーム」のいずれも、そこに集う人びとは新しい「私」の創出を期待しており、それが暴力と結びつく契機となりうる点で共通していることが指摘される。だが、オウム真理教の男性を中心とする幹部信者たちは、新しい「私」の創出だけでなく、新しい「世界」の創出をもオウム真理教に期待し、それが外部に向けた暴力に結びついた。それに対し、オウム真理教と「スピリチュアル・ブーム」の女性信者たちは、新しい「私」の創出に没頭する反面、「世界」の創出には関心が薄く、暴力を対外的に表出する理由を持たなかった。さらに、「スピリチュアル・ブーム」の女性たちは、「社交」と「品定め」の楽しみという、別の魅力をも見出している。そのことによって、彼女たちは、宗教をたえず日常生活の文脈に引き寄せ、モノ化し、消費しており、それによって宗教の暴力を回避していると考えられるのである。

予言が当たったとき

——アセンション信奉者の震災後の態度——

堀江 宗正

スピリチュアルなものに関心を持つ人々の間で「アセンション」という観念が注目されている。アセンションは、地球という生命体・意識体の次元上昇、個人の魂の進化を指す。進化しない魂はこの古い世界に残るとされる。ここでは、地球の不調和な部分の浄化作用、災害や戦争が起こるという。時期は、マヤ暦が終わる二〇一二年一月二二日とされてきた。最近では、二〇一一年一月二八日が暦の終わりだとする計算もあり、その最後のサイクルが始まる同年三月九日から、何かが起こると考えられてきた。また、アセンションは霊性の高い日本から始まるという説もあった。そこに起きたのが東日本大震災である。

本発表では、アセンションと地震を関連づけるようなブログから、震災への反応の傾向を明らかにする。震災後、「天罰」発言批判や「不謹慎」言説が強まり、震災の宗教的意味づけがタブー視されている。アセンションはそのなかでどのように信じられているのか。また終末論と個人的スピリチュアリティの系譜のなかにどう位置づけられるだろうか。

まず次の条件でブログを絞り込んだ。ニュージーランド地震の二月二二日から東日本大震災前日の三月一〇日までの期間指定で「アセンション 地震」の検索語でヒット、内容的に地震

をアセンションと関連づけ、今後とも起きると示唆、震災後も地震関連の発言がある。以上の条件で絞り込んだところ五人のブログを拾うことができた。アセンションを肯定的にとらえている者は二人、距離をとりつつ大震災を予知した者が一人、懐疑的だが個人的アセンションを期待している者が一人、アセンションは人口削減のための陰謀だとする者が一人だった。さらに、震災後、同じ検索語でヒット数が多い三月一二日からの四日間を期間指定して適合度順上位から有意意味なブログを十個拾い、事例の少なさを補った。肯定派は六、前提とするが違和感を表明している者が三、陰謀論の立場からの否定派が一だった。どちらの検索でもアセンションを前提としつつ違和感を表明する者が一定数いる。

肯定派には四つの特徴がある。1 天罰の否定。アセンションは地球の進化であり、震災の背後に超自然的主体の意志は認められない。2 善悪二元論の否定とネガポジ二元論。震災後の世間は互いを非難しあうネガティブな想念が渦巻いているが、自分分は世界がよい方向に向かっているとポジティブに見ている。死後生を信じているので、震災による死亡は罰と見なさない。3 潜在化・個人化。以上のような信念をネット以外の日常生活では話さない。4 日本の特別視。震災を機に日本人の絆が強まり世界から賞賛されている。アセンションは日本から始まった。「がんばれニッポン」という世俗的スローガンと接続することで、災害の宗教的意味づけを警戒する「復興世俗主義」への適応が可能となっている。

復興世俗主義は、地域復興支援のための国民的連帯に価値を

置くが、心のケアを妨げる表現の抑制という観点から、災害の超自然的原因を求めることに否定的で、むしろ人的責任を追及する。この批判的態度をアセンション信奉者はネガティブな状態とする。彼らは「地球」や「日本」を抽象的に意識するが、被災者への共感の薄く、自己のポジティブさに固執する個人主義者である。それに対して、アセンションに違和感を持つスピリチュアルな人々は、地球や日本よりも日常生活の正常化に関心を寄せる私生活主義者である。

多中心的でカリスマも組織も持たず、個人のポジティブな心理状態に固執するアセンション信奉者の傾向は、終末論の個人化・心理化を示唆している。他方、個人的スピリチュアリティの潮流において、世界の破滅の想定や論争的雰囲気は一般的ではない。暴力的なカルト団体が楽天的な終末論と個人主義的な集まりから始まった例もあることを想起すれば、一部のアセンション思想家から逸脱的組織が発生する可能性も否めない。

近代化・世俗化・宗教

——危機の時代からの再考察——

中野 毅

一 近年、政教分離、国家・政治と宗教、近代化と世俗化に関する議論が、政治学や国際社会論などの領域において、「宗教」を重要なファクターとして取り入れて盛んになっている。

昨年はイスラエルの政治学者 Jonathan Fox の統計学的(計